



原形を留めない街並み

巨大地震に伴う大津波が発生

平成23年3月11日(金)14時46分に東北地方三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生し、宮城県栗原市で震度7が観測されたのをはじめ、宮城・福島・茨城・栃木の4県36市町村と仙台市内の1区で震度6強を観測しました。

その直後に発生した大津波は、東北の三陸地方に面する広い地域を街ごと飲み込み、各地に甚大な被害をもたらしたほか、福島県では原子力発電所で事故が発生し、多くの方々が避難を余儀なくされる未曾有の大災害となりました。

被災地に救護班を派遣

京都府支部では、地震発生後、直ちに情報収集を開始し、管内医療施設・レスキューチェーン京都等との連携のもと、同日16時59分に第1班となる医療救護班が現地に向け支部を出発しました。

以後6月19日までの間、計16個班(延べ134名)を宮城県・福島県・岩手県に派遣し、救護活動を行いました。



避難所を目指して移動する救護班



雪の残る中を次の避難所へ移動

福島県では、約16万人の方々、自宅を離れての避難所生活を余儀なくされたことから、避難所の一角に臨時救護所を開設し、診察の他、医薬品の処方を行うとともに、毎日巡回診療を実施しました。また、現状を把握し効率的な活動が行えるように、全体ミーティングを開催し、情報の共有に努めました。

巡回診療開始

現地に入った救護班は、石巻赤十字病院内に設置された現地災害対策本部の調整により、被害の全容が把握できない中で、診療を兼ねて避難所を巡回し、状況を本部に報告するなどのローラー作戦を展開しました。



情報交換と全体ミーティング



京都第一赤十字病院
高階謙一郎 医師 (第1班班長)

平成23年3月11日、静かで大きく緩やかなゆれを感じ、直ぐにインターネットで地震発生を感知しました。ERに向かうと、既にDMAT隊員が情報収集と資機材の確認を行っていました。

我々は京都府基幹災害拠点病院・DMAT活動も兼ねるため、16時30分に病院を出発しました。移動中は全国の赤十字救護班・DMATと連絡をとり、21時間後の翌日午後2時に仙台医療センターに到着しました。

休む間もなく宮城県災害対策本部での活動を指示され、混沌とした県庁内で日赤宮城県支部の指揮下で、仙台市周辺の避難所の情報収集や派遣医療チームの調整を行いました。

翌日は石巻赤十字病院に移動し、夕方、石巻市雄勝地区からの搬送要請に対応すべく、自衛隊車両とともに警察、消防が未踏の同地区に向かいました。見渡すかぎり建物すべてが津波に流されてしまった光景、真っ暗な中、ご遺体が建物に残っている横で、住民が集まって対策を練っている姿は今でも忘れることはできません。

その後、女川町等でも活動し、3月17日に活動を終えました。平成26年10月に雄勝地区を訪れた際、「京都から3月13日に来たんですよ」と話したところ、「赤十字の方ですか」と感謝の言葉をいただきました。われわれの活動が少しでも役に立ったことを実感し、更なる活動の励みとなりました。

救護活動はないに越したことはないのですが、万が一の際は「すべては被災者のために」をモットーに、任務を遂行したいと考えております。

本活動にご支援いただきました病院スタッフ、京都府支部の皆様にご感謝申し上げます。